

# 瑞寶中綬章の園田先生とベンチャー企業設立の志水先生に聞く

本学の園田孝夫先生と、志水英二・芸術情報学科長のおふたりに、「学生生活と社会の接点」、「社会へ出ていく心構え」などについてうかがいました。

園田先生は、名門、ハーバード大学・マサチューセッツ総合病院に留学後、36歳のとき、大阪大学医学部教授に就任され、その後、大阪大病院院長、大阪府立病院院長を経て本学にこられました。財団法人大阪腎臓バンク理事長なども歴任し、さきの紫綬褒章について、このたび今年度の叙勲で瑞寶中綬章（教育研究分野）を受けられました。

また、志水先生はかねてから大学と企業・社会の連携プレーを推進しておられ、このほど視覚障害者や高齢者向けの「電子めがね」などを開発・販売するベンチャー企業「ウェアビジョン」を科学技術振興機構とともに設立されました。大学と社会の垣根はますます低くなっており、国は社会の活力として大学に大きな期待を寄せています。志水先生のご活躍はタイミングにかかったものといえましょう。

おふたりの体験から生まれた助言を、みなさんの学生生活の充実と社会への円滑な橋渡しに役立ててください。

## ■あなたと社会を橋渡しするコミュニケーションの大切さ

（園田孝夫先生の談話）

みなさんは芸術、私は医学。学ぶ対象は異なっているようにみえますが、じつは共通点があるのです。古代ギリシャ時代にさかのぼると、芸術も医学も「アルス=アート」でした。芸術と医学は、同じ概念、同じ言葉でくられていたのです。その理由は、ともに技術を必要とするこのほかに、「人間をあつかう」ということからきているようです。外科医の前身は散髪屋さんといわれています。散髪屋さん、直接、人間の体に触れる、人間をあつかい、人間に細工を施すでしょう。それが外科医の始まり、というわけです。いまも散髪屋さんのお店の看板のシンボルマークは赤 青の組み合わせですが、これは血と包帯の色を表しているようです。



## ■芸術も医学も「人間をあつかう」はポイント

芸術と医学の共通項の一つが「技術」であり、もうひとつは「人間をあつかう」ことにある、というのはおもしろいとおもいませんか。ともに大事な事柄ですが、とくにここでは、後者「人間をあつかう」コミュニケーションの重要性を強調したいとおもいます。優秀な「わざ」だけでなく、それが人間に、社会に、具体的に役立つことが重要なのです。人間社会を抜きにした技術は、空の持ち腐れ、になりますよね。みなさんの芸術の「わざ」を、人々に知ってもらい、つかってもらい、企業や社会に役立つべく、そのことがおたがいの利益につながり、喜びでもあるでしょう。

ところで、このことを逆にいうとどうなるでしょうか。みなさんは大学で学ばれたことを今度は社会で役立てる番です。社会の人々や企業に「自分のわざ、芸術、能力」はこうです、とまず知ってもらわねばなりません。それが学生生活から社会・企業に進むワンステップ、第一の橋渡し、というわけです。いまのように情報があふれた社会では、自分の存在を人々に、企業に、知ってもらい、ということとはなかなかたいへんなことですが、まずコミュニケーションを大事にすることとおもいます。わたしの経験では、人々とのつながりを大切にすることでおのずから社会との接点が生まれてきます。

みなさんの近所でも、開業医で評判のいいお医者さんがいるでしょう。その患者さんへの接し方はなかなかのもので、技術もそうかもしれませんが、コミュニケーション力がすばらしい方が多いですよ。

みなさんもどうか、好かれる言動、愛される人柄、を心がけてください。人間関係を大事にしてください。これは少々学力・技術の差以上に大きな能力といえます。社会へ出るワンステップであり、社会に出てからも、パワーを発揮し続けるでしょう。志水先生もおっしゃっているように、信頼できる人に相談し、助言を求めることも大事なコミュニケーションです。みなさんが誠実で真剣であるなら、きっと相手も真剣に応じしてくれるでしょう。

言い忘れましたが、医学と芸術を学ぶ若者でひとつ違う点もあるとおもいます。

## ■社会の感性に自分の感情を重ねる自己アピールを!

医学は基礎的な積み上げが欠かせません。あとからきた若者はこつこつ黙々と先輩たちの残した学問の蓄積をたどっていくかねばなりません。飛躍という要素が少ない分野です。それに対して芸術は、個人の感性、が大きな要素を占めますよね。むしろ、一定の蓄積、基礎勉強は当然必要ですが、医学に比べてみなさんのひらめき、直感、といったウエイトがうんと大きい。

コミュニケーションを大事にするというのは、なにも自己主張を抑えるということではありません。医学部の学生以上に、自分の感性、主張、アピールが認められるし、また、そうせねば意味がありません。社会の感性をさぐり、それに自分の感性をうまく上乗せできたとき、それがすばらしい芸術作品にならなくても、みなさん自身が社会に役立つ人材となるワンステップになる。この努力は実る。これはだれでもが可能だと信じています。

経済的なしんどさは私たちの学生時代も同じでした。でも、本学に限らず、学生のやる気、意欲は私たちの時代のほうが強かった気がします。大阪大学の学生でも、和歌山や滋賀県の自宅から朝一番の電車でやってきて、教室の1番前の席を奪い合うようにして勉強に励んだ人がたくさんいました。ほかの学生もそれに刺激されてがんばったものです。

## ■ひとりで悩むな、相談しよう、電話をかけよう、メールしよう、道は開ける

（志水英二先生の寄稿）

医学で学んだこともない私が目の病で苦しむ人達を支援することができるすばらしい電子めがねを発明できた理由は友人、知人達である。眼科の名医、ものづくりの名人、ひとつのつながりづくりの名人…。私の周りには、私を安い費用で外国へ出かけさせてくれる名人すらいる。みんな一人でできる名人、芸術家みたいな人達である。私はそんな名人たちを使う名人。若者よ、一人で悩むな、三人で困れ。凡人一人でできる仕事は小さい、自分の能力の範囲でしかできぬ仕事になる。やがて、名人になって、集まって大きな仕事ができる日々をめざして、がんばってほしい。



## ■わたしは名人を使う名人?

それでは、私の電子めがね開発までの経験談を聞いてください。不老不死、始皇帝も望みながら果たせなかった夢。しかし、近代技術はこの夢に向かつて挑戦を続けている。知力が老いと共に衰える。例えば認知症。

認知症への挑戦は能という人間そのものへの挑戦という強烈な試みであるがゆえに、成果を出し得ずにいるが、医学者、技術者たちの意欲は凄ましい。

人は外部からの情報の8割を視覚から得る。それゆえに視覚の衰え、視覚機能喪失は脳の衰えと同じ程度に知的能力の衰えに直結する。70歳を過ぎると3人に一人が陥る病がある。黄班変性である。人は黄班によって 相手の表情を読み取ったり、すばらしい絵画の細部までを鑑賞できる唯一の動物である。

この黄班は目の中心部の直径2ミリの円状である。これが機能しなくなるとどうするか、黄班をデジタルカメラのシリコン感光体で置き換えよう、この考えは有望であるといえ、その実現にはもう15年はまたなくてはならない。目の組織になじむシリコンがないからである。じゃあ、それまで黄班変性の患者に盲目のまま待つていただくか、それはできない。これが、網膜投影型電子めがね発明の動機である。

## ■酒席で生まれた電子めがねの発想

私の友人の眼科医が酒の席で、「眼球の後ろ半分は光に感じる網膜である。」と語った。「じゃあ、駄目になった黄班の代わりに、残った健全な網膜部を使って見ればいい。」「そんなことできるはずがない、世界中、誰もできたことない。」「いや、やれる方法がきつとある。」そして、その方法があった。マクスウェル視という方法。この方法で、生き残った網膜で見ることが出来る電子めがねを作った。大学の眼科での最初の臨床試験の日、1年前に黄班変性で、視力を失ったおしいさんに発明した電子めがねでNHKテレビを見てもらった。たまたま、天気予報の時間「先生、また、あの天気予報をみる事ができた!とおしいさんの叫びにも似た声。目の不老不死への挑戦勝利の第一歩だった。「先生、これ、今すぐください!」との難題。

その後は、早く、これを持っていてる患者さんに安く渡さなければ、の想いで一杯。大きな電子メーカーを訪ね歩く。「特許は全て差し上げますからこれをつくってください。」答えは同じ。「これでいくら儲かりますか?目の悪い老人が出せるお金はしたものでしょう。」

企業回りに疲れ果て、とうとう、自分で会社を作って、待っている患者に渡す以外に方法がないとの結論に達する。タイミングよく文部科学省が大学の先生のアイデアの企業化の支援をしてくれる時代になっていた。但し、企業をしない大学の先生が社長になることは駄目。会社探しを社長候補探しに切り換えて奔走。そして、この6月に「ウェアビジョン」なる会社がスタート。私は技術顧問。

これで、もうすぐ黄班変性の患者さんに私の電子めがねを手渡すことができる。



一昨年、ロンドンで開かれた国際低視力会議で志水教授は低視力者支援用の「電子めがね」を発表し、注目を集めた。その折、英国王室芸術学校（ロイヤルカレッジオブアート）の研究員であるカセム・ジュリア先生とともに、自宅近くの、紀元前3000年ほどの巨石遺跡（ストーンヘンジ）を訪ねた。ユネスコの世界遺産のひとつ。そのそばの写真用の小岩にて。



No.74 2007年 2月号  
宝塚造形芸術大学

## 特集：学生生活と社会の接点を充実させる

### 社会に向けて発信しよう! 他流試合で腕試しを! コミュニケーションの大切さ! 一人で悩むな、相談しよう!

みなさんはやがて社会に出て行きます。大学と社会の垣根はずいぶん低くなったといわれますが、社会へのスタートダッシュに備えていま何が必要なのでしょう。社会へ出る日のために——経験豊富なふたりの先生にその心構えと考え方をお寄せいただきました。また、在学中から社会に向けて発信し、他流試合で腕試しをしている学生・卒業生の活躍ぶりを特集しました。

## ベテラン先生に心構えを聴き、チャレンジする学生を紹介

社会に向けて発信しよう。他流試合で腕試しをしてみよう。在学中から学外にチャレンジし、成果をあげている学生や卒業生の活動の一端を紹介します。本人の抱負、受賞作品、そして指導教員にそれぞれコメントしていただきました。

## 日展入選2人

見ている何かわくわく楽しくなるような絵を描きたい

日本画コース 4年 田原 麻衣



この絵は、日曜日のエスカレータとそこにいる人々を描きました。遊び疲れて眠ってしまった子供を抱えたお母さんや、向かいの人間を興味深そうに見つめる男の子、スーツを着たおじさんは休日出勤のサラリーマン、ワンピースの裾を翻し颯爽と駆け上がっていく女の子、携帯をいじる部活帰りの高校生、孫と一緒に買い物を楽しむおばあさん……。上りと下りのエスカレータですれ違う、そんな人々の流れを画面一杯に描きました。ただそれだけでは物足りなかつた為、風船を持った男の子を絵の中心に持ってきました。描き始める最初の段階からその風船を鮮やかな赤色にしようと決めていたので、エスカレータの手すりや他の部分にはその赤を引き立たせるような色をと考えて決めていました。風船の赤を目立たせる為に、周りの部分を一度描いた後水で洗い流し、風船と、それを持った中央の男の子だけがスポットライトを浴びているように描きました。日曜日のにぎやかで楽しい雰囲気伝わらう、全体的に明るい色使いを心がけました。



制作風景

描き上がってみると、思っていたよりもずっと鮮やかな明るい絵になったように思います。描きだした当初は、もっと白っぽいぼんやりとした絵にしようと思っていました。けれど描き進める中で、この人達はどんな人なのだろう、この日一日をどんな風に過ごすのだろうと考えるうちに、もっともっと日曜日のにぎやかな雰囲気を出したい、楽しい雰囲気を出したいと思い、それをみる人にも伝えたいと考えました。その結果、自然と今までの自分の絵の中で一番明るい絵になったように思います。

けれど、今はまだ、髪の毛や鼻、足の形や身体の厚みのような目に見える人間という形をただ描いているだけで、あの場の雰囲気やそこにいる人々をまったく描けていないように思います。ただ人間の輪郭をなぞるのではなく、人物を描く事によって何かを、その人物を描きたいと私に感じさせる何かを表現したいのです。

今後も、もっと一人一人の表情や雰囲気を描き分け、小さい頃に読んだ絵本のように、見ている何かわくわくと楽しい気持ちができるような、見た人が明るい気持ちになれるようなそんな絵を描きたいと思っています。



## 夏から秋へ 植物の柔らかで少し寂しい雰囲気を描いた

日本画コース 3年 梶原 美紀

この作品は金網に絡みつく蔦をモチーフに、季節が夏から秋に変わる頃に見られる植物の持つ柔らかで少し寂しい雰囲気を描いたものです。

大学へ通う道の途中にある何気ない風景になんとなく惹かれ、毎日眺めている内に少しずつ変化していくその様子を絵にしてみたいと思うようになりました。“金網”という無機質な存在によって引き立つ“植物”の生命力と、夏が終わる頃を感じる特別な空気を表現したいと思い、制作に取り組みました。

今回の作品で特に大切にしたい事は“色”です。

とにかく植物が纏う雰囲気を表現したいと思う気持ちが強かったので、淡くて柔らかな深みのある色合いを出せるように毎日画面に向かいました。

日本画で使用する岩絵具は塗り重ねる事によって深みや透明感が表現できます。今までの作品に比べ、自分の出したい色味を少しずつ出せるようになってきた事が今回の作品を描いた上で一番嬉しいと思える事でした。ただ、岩絵具の深みや透明感を全て引き出せたかと言うとそうではなく、最後まで納得出来る色合いにはならず、改めて岩絵具の奥深さを知りました。



第38回日展入選「夏の終わり」

いつか岩絵具の持つ良さを引き出す事が出来るように、毎回色々な技法を試したりしながら進めていく過程が私にとっては日本画を描いていて良かったと思える時なので、これからもその姿勢を崩さずに自分の表現を深めていきたいと思っています。

この作品が日展に入選した時はただ驚くばかりで、嬉しいと思うよりも来年はもっと描き込んで納得いくものを出品したいという気持ちになりました。時間が経ち、少し実感が

湧いてきた今でもそう思っています。

これから絵を描いていく上で、今回の入選は貴重な経験になりました。この経験を忘れずにこれからも絵を描き続けていきたいです。



制作風景

## 大人が失ってしまった才能、それは若者の感性だ!

● 講評 曲子 明良

田原麻衣 (4年生) 「日曜日」

駅のエスカレーターを縦に切り取ったシンプルな構図が切れ味を感じさせる。行楽に出かけるのであるのか、はたまた家路に向かうのであるのか、色々な人物をうまく配置して日曜日の家族連れの表情や動きをよく観察している。画面全体の色調を少し抑さえ気味にして中央の子供が持つ赤い風船に焦点を当て観る人の目を引きつける巧みな絵作りである。

ただ借られるのは少し仕事不足で絵が薄っぺらい。もっと時間をかけて描いたり消したりを繰り返すことによって岩絵具の輝きと厚みが出てくる。そうすればもっと良くなる。しかし絵作りに独特のいい感性を持っているので今後大いに期待できる。

梶原美紀 (3年生) 「夏の終わり」

フェンスに絡まった夏草に移ろいゆく時のながれを託して秋の訪れを感じさせる。どこにでもある日常的な情景を捉える着眼点が画家としての可能性をみせる。少し斜めにずらした構図が画面に動きを出し、しっかりと塗り込んだ岩絵具の美しさが光る爽やかな作品である。ブルーとベージュトーンの色感が美しく夏から秋への移ろいを巧みに表現している。

これからの課題としては、葉っぱの形が少し甘いのでしっかり写生をしてほしい。特に植物の場合よく観察することによりそれぞれの固有の癖が見つければ自分の好きな形や流れに変えて行く事ができるようになる。色感や絵作りの感性は素晴らしいものを感じる。

我々大人から見ると二人の作品はまだまだ未熟で稚拙にみえるが、審査を経て入選したという事は若者らしい生き生きとした輝く感性が作品に出ていたという事である。日展に入選するという事はそう容易事ではない。新人が入るという事はその分ベテランの常連作家が落ちるという事である。我々の周囲にも毎年入落で一喜一憂している作家が何人もいる。学生達は透き通ったクリスタルな感覚をみんな等しく持っている。若い人の感性というのはそれ自体が大人が失ってしまった才能なのである。本学の日本画コースから後に続く学生達が次々と出てくる事を期待している。

り言うことは顧客や上司に好印象をもたれ、とても有利です。プレゼンテーションの重要性はおそらくみなさんの想像以上です。私は崎田先生の授業、指導を通じて、知らず知らずのうちにその力を培うことができ、感謝しています。

大学院では菅原先生の、いわば「大人の授業」を受けることができました。大人の授業、というのは、社会の動きや流行、社会人の意見や考え方を十分に反映した授業内容や授業形式を受けたということです。たとえば、私が教員の立場になって授業をすすめる試みとか、作品についても社会人の立場からの質問をうけ、それに答えるなど、私が実際に社会に出ても即戦力で対応していけるようご指導いただきました。

炭釜先生には、キャドを教わりました。洋服のデザインを製図や建築のようにコンピュータで設計するのです。授業以外で勉強したいと思っても、高価な機械を使うので自宅ですというわけにはいきません。大学でしか学べません。それで炭釜先生をみつけると、授業と関係なく、「先生、時間があいてますか?」とおしかけていきました。先生はいつも嫌な顔せず、時間外の個人レッスンをしてくれました。ありがとうございました。

最後に学生の皆さんにひとこと。

私は大学院に入る前、社会人として働いていました。その経験からいうと、ストレートに大学生活をしている人は社会人に比べて、勉強への意欲というか、取り組みがいひとつ積極的でないようにおもいます。言葉を変えると、甘い、真剣さが足りない、ということです。これはなにも本学の学生に限ったことではないでしょうが、たとえば、課題の提出にしても、締め切り時間は必ず守る、といったことは最低限のルールとして心がけてほしいとおもいます。

(針木さんは、在学中からファッション学会、ファッションビジネス学会論文誌などへ「世代間におけるファッション意識と行動に関する考察」「中高年代女性のライフスタイルに関する考察」「衣ライフスタイルに関する考察」など多くの調査報告や論文を発表しています。)



制作風景

## 実体験を活かした研究を進める

● 講評 嶋田 喜美枝

針木 文さんは、平成6年に本学の産業デザイン学科ファッションデザインコースに夙川学院短期大学より編入学してきました。本学の学生とすくにとけ込み、意欲的に本学のカリキュラムを習得していました。また他の学生が1・2年次で履修する科目も受講するなど、非常に頑張っていました。その結果、本学主催のユニベルシテド宝塚コレクションでは、2年続けて朝日ファミリーニュース賞や特別賞を受賞して

## コニカミノルタ フォト・プレミオ [24人の新しい写真家登場] 入選

### 「虚構の故郷」を作り出したかった

写真コース 2年 北田 祥喜

この作品で私は生まれた場所である和歌山を撮りました。写真の中で作り出したかったのは「虚構の故郷」です。父の幾度かの転勤で私には故郷といえる場所がありません。和歌山は生まれただけで、そこでの暮らしの記憶がないため故郷とは言えない場所です。その和歌山を何度も撮り続ける事で、虚構ではあるが故郷を作ろうと決めました。

しかし問題は「故郷を知らない自分が故郷を考える」事でした。具体的な内容がまとまらない中、思い浮かんだ和歌山の文化や風土・地理などの情報だけを手に現地に入り、まず写真を撮る！ことを始めました。

子供時代の故郷を表現するために、いつも「子供である事」を意識しながらシャッターを切り、その時私はどのように風景を見たのか、どのようなモノに興味をもったのかを考えながら、とにかく街外れに写真を撮りました。

灯台の上から見た水平線を、ファインダーを見ずに撮影もしたりもしています。海に対する子供の無邪気な視線と高所からの興味を表現したかったからです。

撮影を続けるうえで絶対必要だったのが、会話によるコミュニケーションでした。カメラを手にとると必ずと言っていいほど警戒され、その浴びせられる視線の中では撮影すべき構図に集中する事も出来ず、加えて、子供であるはずの私自身が、興味を



入選作品「和歌山ブルース」

## 第二回「ZOOOKAマンガ大賞」の表彰式行われる

## 国内外から482点の応募 今年の2倍を大幅に超える盛況

本学主催、毎日新聞社後援で昨年創設された「ZOOOKAマンガ大賞」の今年度の表彰式が12月9日に毎日新聞大阪本社で行われました。一般、大学・専門学校、中学・高校の3部門で短編コミックス、1コママンガ、4コママンガ、キャラクター、絵本のジャンルにブラジルを含む国内外から482点の応募がありました。昨年より295点多い応募でした。松本零士教授を審査委員長に、マンガ家の森脇真末味さん、崎田副学長、西上教授、柳教授、大河教授、朝野教授らが審査し、18点と学内推薦賞4点の計22点を選びました。このうち本学生は12点でした。

表彰式は、崎田副学長ら本学関係者のほか、毎日新聞大阪本社から山崎一副代表、鈴木敬吾学芸部長も出席。スクリーンを使って入賞作品の紹介をしながら行いました。入賞作品は2月10日～3月28日までは梅田キャンパスで、4月7日～4月25日まで新宿キャンパスで展示されます。(朝野富三教授)

本学学生の入賞者は右記の通りです(敬称略)。

います。卒業後は「先生になる」というもうひとつの夢を叶えるため、教員免許を取得し、さらなる向上心が目覚め、本学の大学院修士課程に進学しました。大学院においては、学問としての「ファッションアート」や「ファッションビジネス」について、実体験を活かした研究を進め、「ファッション・スタイル・プランニング教育のカリキュラム提案」など数々の論文を発表しています。大学院卒業後は、夙川学院短期大学や相愛女子短期大学で教鞭をとり、ファッション分野における新しい世代の教育に力を注いでいます。今後も、針木さんの活躍を期待しております。

持つようなポイントを聞き出す事も難しくなってしまう。

地元の人に声をかけ、路地のオバサンたちや買い物に入った店の親父さんとのやり取りから、子供であれば興味を持つ場所やモノを想像し、いろいろ面白い撮影ポイントを見つける事ができました。

その中から出来た写真の風景は現実ですが、哀愁漂う虚構の故郷が表現できたのでは、と思っています。

写真はデジタル化し、ともすれば画像処理による新しい表現方法のみが強調される風潮がありますが、事実の積み重ねで本質と伝える写真表現の意義は今後も変わることはないと考えます。これからもアナログ・デジタルの区別なく、写真で語れる作品作りをしていくつもりです。

### 落選を乗り越え、数万カットを撮り続けた努力の成果

● 講評 友長 勇介

彼がまだ1年生だった頃、夏休み明けに「作品を作りたい」という相談があり、何度か話し合い、ほどなくテーマが決まりました。ここまではよくある話ですが、その後の彼の頑張りには目を見張るものがありました。暇を見つけてはテーマである和歌山に撮影に行くという日々が続いたようです。

撮影を始めて半年が経ち、彼は数万カットの写真を携えて意気揚々と私のところに来てくれました。作品ができればコンテストに出そうと話をしていたので、彼の言動を察するところコンテストには入選するだろうと思っていたようです。が、結果は落選。

ここで気持ちが萎えるところですが、落選後も彼は粘り強く和歌山を撮り続け、更に半年をかけた数万カットを撮り足し、見事入選を果たしました。

彼を見ていて「努力」という言葉が思い浮かびました。当たり前ですが、努力をしないと結果は付いて来ないということに彼はこの1年で体感したと思います。

彼は今回のコンテストの為に数万カットという膨大な数の写真を撮ってきました。これはやはり努力の賜物であって、「よくやった!」と素直に褒めてあげたいと思います。

この結果に満足する事なく、努力を忘れず頑張ってください。

### 【大学・専門学校の部】

- 最優秀賞・松本零士賞=奥本幸恵 (3回生)
- 奨励賞=坂野未来 (3回生)
  - ／川野智美 (3回生)
  - ／藤川 綾 (3回生)
- 佳作=右田知代 (2回生)
  - ／杉山愛実 (1回生)
  - ／清水麻貴 (2回生)
  - ／伊藤絢子 (3回生)

### 【学内推薦賞】

- 最優秀賞=中川真恵 (3回生)
- 奨励賞=坂尾恵利 (3回生)
- 佳作=藤川 綾 (3回生)



応募作品を審査する崎田副学長、松本零士教授、森脇真末味さんら(右から。宝塚キャンパスで)